



アムステルダム在住のピアニスト、向井山朋子が2012年から日本で行ってきた『Multus(マルチタス)』は、複数のピアニストと音楽以外のアートが融合して、新しい要素が増殖していくエキサイティングな試みだ。2012年に日本初演された、オランダ人作曲家シミオン・テン・ホルトのミニマル・ミュージック『カント・オスティナート』が、この3月にパワーアップした形で再演される。

今回参加するのは、日本とオランダの4人のピアニスト。ひとつの旋律が執拗に繰り返されるこの曲は、聴く者に特別な興奮をもたらす作用があると向井山は語る。

「カントは“歌”、オスティナートは“繰り返し”という意味です。ホルトがこの曲を作った当時、アカデミズムの世界ではセリー音楽など前衛が主流でしたが、この曲はメロディが美しく、キッチュを越えた情緒があり、指使いもショパンのようなのです。オランダでは、ある程度教養のある人でこの曲を知らない人を探すのは難しいほど。続けて演奏されるので2時間休憩なしですが、7時間続けて演奏されることもあるし、24時間という記録も残っています。その間にトイレに行ったり、眠ったりもしているのでしょうね。私も途中でコーヒーを飲みたいけど、2時間でそれをやったら怠け者だと思われちゃいますね(笑)」

この曲の持つスリルは、演奏家が常に新鮮な“今”という時間を感じ、共演者と濃厚なコミュニケーションを行うところにもある。

「複数のピアニストと一緒に弾きますから、例えば“ここでクレシェンドしたい”と強く弾く人が現れたりしますよね。それに対して、他の演奏家たちは同調してもいいし、そのまま弾き続けてもいい。途中で弾くのをやめていいし、すべて自由なんです。テンポの指定はあるけれど、強弱やレガート、スタッカートなどの指示は書かれていないから、リハーサルでは何も決まらない。その日の体調やフィーリングですべてが決まってくるようなところがあります。聴衆には、自分のお気

に入りの照明を会場に持ち込んでもらって、共通の電源に繋げて操作するんですが……とても気軽な自己参加型のアートですね(笑)。いつも共生している照明たちが音楽とともにあって、最後はすべて消えていく。お客さんには、平たいところに座布団を置いて座っていただくのですが、寝袋を持ち込んでいただいてもOKです。オランダではこの曲を愛する人たちのドキュメンタリー映画が作られたほどで、自分の子を出産するときに流していたという女性や、亡き母親と一緒に聴いた思い出として、楽譜をタトゥーにして体に入れてしまった男性もいました」と語る向井山。

彼女がアムステルダムに渡ったのは25年前。若いアーティストがのびのびと生活する自由な環境に、驚いたという。

「人と人との距離の置き方や、相手のリスペクトの仕方が、それまで留

学していたアメリカよりもすごく成熟していると感じました。アートに関して、お互いのジャンルの垣根が低いのもヨーロッパの特徴ですね。振付家のイリ・キリアンと仕事をしたときは、彼が本当に深く音楽を理解していることに感動しました。音楽もダンスもアートもファッションも、ジャンルとして断絶せず、相互に影響を与え合っている。表現として遠くまで飛べるものを作るためには、ひとつの専門を究めるだけでは足りない、窮屈になってしまうと思います」

彼女自身も、卓越したテクニックを持つ演奏家としてクラシックのホールでリサイタルを行う一方、まったく音楽の登場しない視覚的な現代アート作品を発表し続けてきた。

「可能なことと不可能なことの間に、線は引かれていないな、と感じた瞬間があったんです。不可能だと思っていたけど、やり続けていくうちに限りなく“可能”のラインに近づいていく経験をしました。人間は、表現をする人もしない人もみんな凄いです。皆が秘めているものを表に出すことができるのが、アーティストなんです」

NEW WORLD

ジャンルを越えた世界を創造する表現者

ピアニストとして世界で活躍し、現代アート作品や他ジャンルとのコラボを発表する向井山朋子。彼女が試みる、新しい音楽の実験とは？



MY PRIVATE ODYSSEY (2014)

MULTUS#3 (2015)

▶ MULTUS#3『人生を変えてしまうメロディー』カント・オスティナート4台ピアノ版 3/7~8、アサヒアートスクエア。3/11、まなみーる 岩見沢市民会館。3/14、クリエイティブセンター大阪。